

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

特210

650

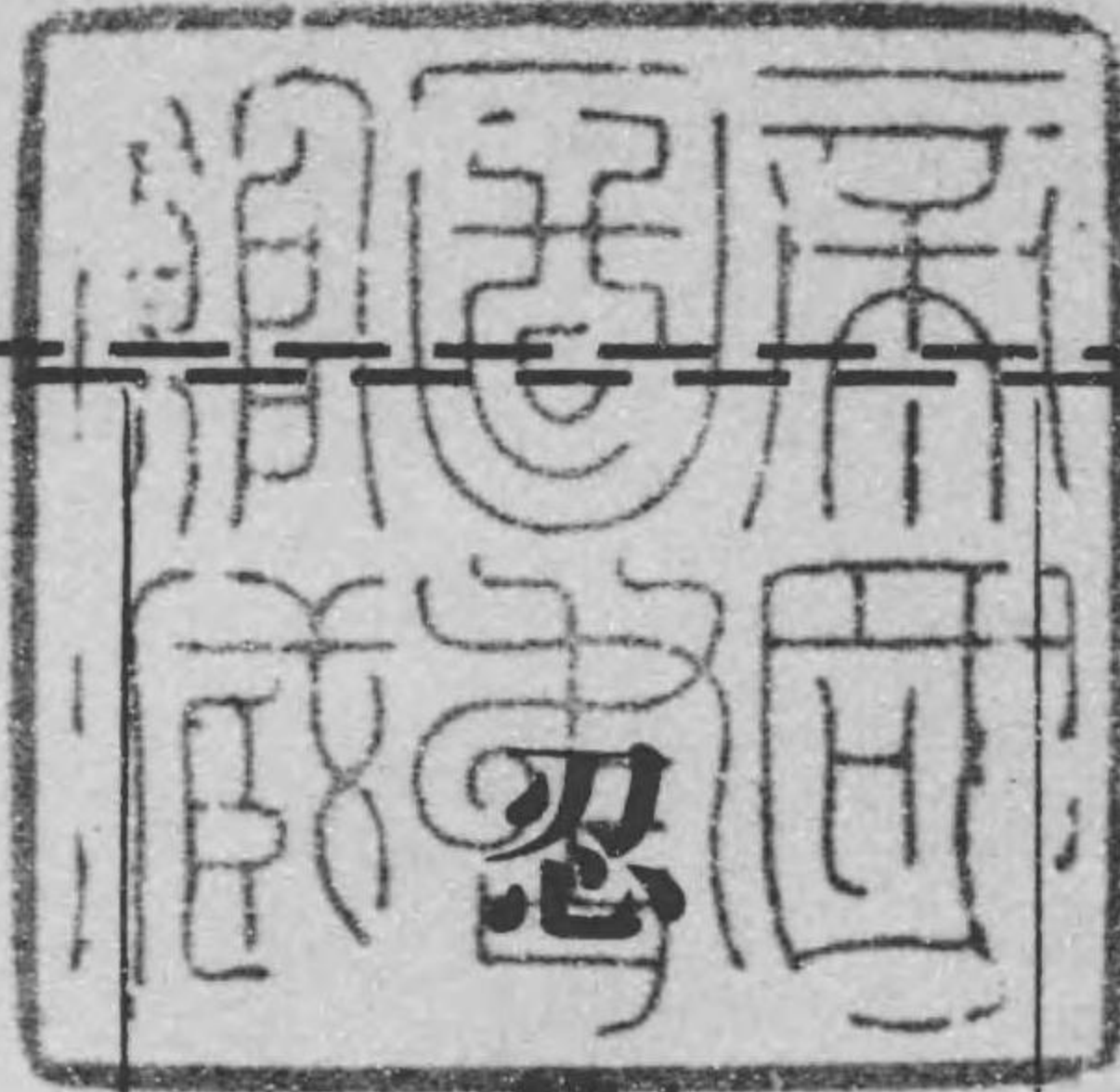
甲賀流第十四世 藤田 四郎 景

忍術とは

始



特210
650



忍術甲賀世流

藤田西湖

術とは？

東京講演會出版部刊



忍術とは？

目次

一 忍術の本領と使命……………一

【一】 現代人と忍術……………一
 科擧と忍術……………一
 現代生活と忍術……………二
 忍術はスパイ術……………二

【二】 忍術の使命……………三
 忍術の職能……………三
 講述の順序……………四

二 忍術の沿革……………五

【一】 支那に於ける忍術の由來……………五
 最古の忍術……………五
 孫子の「用間」……………六
 間諜・細作・姦細……………七

【二】 日本に於ける忍術の由來……………八
 上代に於ける忍術……………八

源義經と忍術……………一〇

毒瓦斯使用の先驅者……………一一

最古の忍術傳書……………一二

楠正成と忍術……………一四

忍術者の異名別稱……………一五

忍術者を愛した徳川家康……………一六

伊賀者・甲賀者……………一八

半藏門の來歴と徳川の隱密政治……………一九

忍術者を愛さなかつた豊臣秀吉……………二二

【三】 忍術の諸流派……………二三

伊賀流・甲賀流と其諸分派……………二三

現代の忍術者と忍術衰頹の理由……………三五

三 忍術を學ぶには……………三九

【一】 忍術者たる資格……………三九

第一の條件・正義觀念の強いこと……………四〇

第二の條件・頭腦の鋭敏なること……………三〇
 目測に巧みなこと……………三一
 物の利用に巧みなこと……………三二
 何故あの場合頭を使はなかつたか……………三三
 記憶力の正確なこと……………三四
 第三の條件・身體の強健なること……………三五
【二】 忍術修業第一歩……………三六
 水の中で呼吸を我慢する……………三六
 濡れ紙の上を渡る……………三六
四 忍術の練習法……………四〇
【一】 整息法……………四一
 整息の練習法……………四一
 人事を盡して天命を俟つ……………四二
【二】 歩行術……………四三
 一日四十里……………四三
 横歩法・道歩法……………四三
 暗闇で物を見る法……………四四
【三】 跳躍・飛躍術……………四九

飛降・幅飛・高飛……………四九
 駆け方の練習……………五一
【四】 潜水術……………五二
 忍び泳ぎ……………五二
 身邊事物の臨機利用……………五三
五 心身の鍛練法……………五七
【一】 五體の練磨……………五七
 逆手の練習……………五七
 武器なくして敵を斃す練習……………五九
 最後迄闘ひ抜くのが忍術者の精神……………六二
【二】 内臓の鍛練……………六三
 断食絶食の練習……………六三
 不眠不休の練習……………六六
 食食の練習……………六六
 幾らでも寝續ける練習……………六八
 「痔に入つては痔に従ふ」練習……………七〇
 體臭を消す練習……………七〇
 幾らでも酒・煙草を飲む練習……………七一

立て續けに煙草を十箱……………七三
 大酒は一斗以上……………七五
【三】 毒物・いかもの喰ひ練習……………七六
 どんな「いかもの」でも喰ふ練習……………七六
 毒物を喰つても當らぬ練習……………七七
 硝子や傳染病の微菌を喰つても平氣……………七八
 人間が病氣をするのは間違ひ……………七九
 少食満腹・大食不満腹の練習……………八〇
 眞劍勝負七回……………八二
【四】 變裝術……………八三
 精神統一と精神變裝の必要……………八三
 變裝の諸形態……………八五
 諸藝百般の練習……………八五
六 忍術の方法……………八八
【一】 利用事物及び用具……………八八
 三道・六具……………八八
 毒瓦斯は昔から我國にあつた……………八九
 煙幕も爆薬も昔からあつた……………九〇

【三】 忍術の本義……………九六
 瘰癧ても猶己まざるが忍術の精神……………九七
 「忍」の意義……………九七
 健康と體力の最限……………九八
 凡ゆる苦難に耐へる體力の鍛練……………一〇〇
 如何なる艱難をも克服する精神……………一〇一
 パラシュートは七百年前から……………九一
 潜水服は四百年前から……………九二
 潜入の諸方法……………九四
 蛇・鼠の使ひ方……………九五
 動物の擬聲……………九六

忍術とは？

忍術甲賀流
第十四世

藤田西湖

【1】 忍術の歴史
【2】 忍術の流派
【3】 忍術の修行
【4】 忍術の武器
【5】 忍術の戦術
【6】 忍術の文化
【7】 忍術の現代
【8】 忍術の未来
【9】 忍術の伝承
【10】 忍術の発展
【11】 忍術の普及
【12】 忍術の国際化
【13】 忍術のグローバル化
【14】 忍術のデジタル化
【15】 忍術のインテリジェンス化
【16】 忍術のサイバー化
【17】 忍術の宇宙化
【18】 忍術の火星化
【19】 忍術の金星化
【20】 忍術の木星化
【21】 忍術の土星化
【22】 忍術の天王星化
【23】 忍術の海王星化
【24】 忍術の冥王星化
【25】 忍術のクエール化
【26】 忍術のネプチューン化
【27】 忍術のプルート化
【28】 忍術のセレス化
【29】 忍術のエリス化
【30】 忍術のマケマケ化
【31】 忍術のハイペリオン化
【32】 忍術のテレスティヤ化
【33】 忍術のミケネン化
【34】 忍術のニクス化
【35】 忍術のラダール化
【36】 忍術のタウ化
【37】 忍術のウタム化
【38】 忍術のザウ化
【39】 忍術のケイ化
【40】 忍術のヘラクレス化
【41】 忍術のアルシバ化
【42】 忍術のベネチア化
【43】 忍術のヴェネチア化
【44】 忍術のヴェネチア化
【45】 忍術のヴェネチア化
【46】 忍術のヴェネチア化
【47】 忍術のヴェネチア化
【48】 忍術のヴェネチア化
【49】 忍術のヴェネチア化
【50】 忍術のヴェネチア化

科学と忍術

一 忍術の本領と使命

【一】 現代人と忍術

現代に於て忍術などと申しますと、いかにも時代離れのしたグロテスクな、彼の講談本や、大衆文藝、其の他映画、演劇等に於て見せられる様な不可思議な術、例へば印を結び、呪文を唱へると、忽ち身體が消えてなくなつたり、蝦蟇になつたり、大蛇になつたりする、あの如何にも科学を超越、無視した術の様に思はれる様ですが、忍術はあんな非科学的なものではありません。

忍術の本領と使命

第十卷

藤田西階

現代生活と忍術

忍術は常に何時の時代に於ても行はれて居り、私から観ますと、忍術と云ふものゝ行はれない時は一日としてない、殊に現代の如く生存競争の活舞臺が層一層の劇甚を加へる秋、人事百般、あらゆることに、あらゆる機会に於いてこの忍術は行はれ、忍術の行はれない社会はないと考へるのであります。たゞ忍術と云ふ名前に於て行はれてゐないだけであります。

忍術といふものは嘗ての軍事探偵、今日で申します間諜の術——スパイ術であります。このスパイ、間諜といふものは、何時の時代に於きましても盛に活躍して居りましたもので、今日支那事變その他が起きますと、世界各国の種々なる間諜、スパイが一層活躍しますことは御存じの通りであります。

忍術はスパイ術

忍術の職能

【三】忍術の使命

然らば、そのスパイ術、昔の忍術は一體どんな仕事をやるものかと申しますと、平時に於ては想定敵國の諸情勢の偵察、軍事、軍情はもとより、政治情勢、經濟情勢等から國民思想の動向を調べたり、産業、鑛業、交通、運輸、工業状態から、それ等の諸設備を調査して、いざ戦といふ場合、如何なる手段に出るがよいかの調べをしたりいたします。さうして、これが戦時になりますと、單身敵國內に乘込みまして、敵の重要建物、或は要塞、その他の爆破、敵將の暗殺、機密書類の奪取、鐵道の破壊、給水の妨害、即ち敵の水道の水源地などに毒物、或は培養菌を撒布して、これらの供給を杜絶する。又は敵國に深く潜入

講述の順序

して、あらゆる方法を用ひまして、敵國を非常に不利な状態に陥れる。第三國の干渉を受ける方法をとつて見たり、敵の後方部隊に種々のデマや流言蜚語を飛ばして人心を感亂させる。一方經濟界に對しましては、偽造紙幣その他のものを撒布しまして、敵の通貨の信用を失墜せしめる。かくの如く凡ゆる奸策を施しまして、兎に角戦に勝つ、又その方策を樹てたりします。それがスパイの方法であります。

このスパイの方法は、非常に昔から行はれたものでありますから、スパイ術即ち忍術がどんな風に出來たものであるかといふ其の歴史、それからその學び方、行ひ方といふ順序に分けてお話いたします。

最古の忍術

二 忍術の沿革

【一】 支那に於ける忍術の由來

忍術即ちスパイ術の方法は何時頃から出來たものであるかと申しますと、東洋におきましては、一番古いのは矢張支那でありまして、遠く伏羲神農の時代から行はれたものであるとなつて居ります。兵法、軍學の内の斥候、物見の術として出來たのが、即ち忍術でありまして、最初は太公といふ人が「言」といふ名前でも七十一の方法を考究し行つたものである。

孫子の「用間」

その次は呉の孫子で、孫子はその兵書十三篇の終りに「用間の篇」と云ふのがありますが、この「間」と云ふ名で、あらゆる間諜の術即ち忍術を説いたのがあります。何故この「間」と云ふ字を用いたかと云ふと、この字を分解しますと、門に日が射し入るやうに、どんな小さな門、どんな間隙でも、とにかく極く僅かな寸隙さへあれば入り込む。丁度光線がどんな狭いところへでも、一寸隙さへあれば射し込むことになぞらへたのであります。光線の王は日であります。そこで「間」といふ字を使ひまして、これをスパイ術の名稱とし、五間の術を作つた。この五間と云ふのは「因間」「内間」「反間」「死間」「生間」の五つで、因間といふのは一名郷間とも云つて、郷人里人、今で云ふ市町村民、つまり、その土着民を利用して行ふスパイ。内間といふのは、敵國の官吏公吏

細作、間諜、姦細

を利用して行ふスパイ。反間といふのは、敵の間諜をあべこべに利用するスパイ方法で、今で云ふ逆スパイ。死間といふのは、スパイの生命を犠牲にして目的を達せんとする方法。生間といふのはスパイの目的を達し、生を完うしてかへるスパイであります。

その次は春秋の時代でありますが、この時は忍術のことを「諜」と呼んで居ります。よくスパイのことを間諜と申しますが、これは前述の孫子の「間」と春秋の時代の「諜」を合せ用ひて出来た語であります。

その他戦國時代となりましては、「細作」「遊偵」或は「姦細」など云ふ名前で行はれたものであります。このやうに、古來支那に於きましては、スパイ術は却々進歩して居りまして、今日でも御承知の如く、中支戦線でも、北支

戦線でも、支那側はあらゆる奸策を弄し、第三國の干渉を誘致すべく策動いたして居る事實を見ましても、昔はどれ程盛であつたかといふ事が想像し得られるのであります。

【二】 日本に於ける忍術の由来

わが日本におきまして忍術、スパイ術の行はれましたのは、いつ頃かと申しますと、古事記などにもよく出て居りますが、神代のことはさて置きまして、日本書紀等によりますと、神武天皇御東征の時代に行はれて居るのが一番古いやうであります。それは大和國忍坂村と云ふ處で、道臣命が諷歌倒語の術を用ひて賊を平げた、これは一つの暗號のやうなもので、言葉の中に互ひに暗號を

上代に於ける
忍術

組んでおいて、時を見計らつて合圖をし、敵を謀つて一舉にやつつけてしまふと云ふ術であります。

その次の時代は日本武尊の時代で、日本武尊が女装して、敵營に忍び入り、熊襲の巨魁川上梟師を一刀の下にお刺しになつたのは、つまり忍術の法をお用ひになつたと云つても差支へないと思ひます。この女に化けたり、女を利用したりする方法を、忍術の方では「久ノ一の術」と申して居ります。久ノ一はつまり「くノ一」で、女といふことになりました。現今でもスパイには、この「くノ一」は盛に使はれまして、敵將の中で淫慾に耽るやうな者は、女を使つて、之れを籠絡いたします。熊襲なども、日本武尊を「くノ一」と思つて引掛つたのでありませう。

源義経と忍術

その次は敏達帝の頃に行はれ、また第四十代天武天皇の時代に行はれて居ります。この時清光親王といふ方が逆心を企てられ、山城國の愛宕郡といふ所に城廓を築いて居つたのを、天武天皇の御方より多胡彌といふ忍者を遣して内に放火させ、外より之れを攻めて遂に討平されたとあります。

その後の歴史を一々述べますと長くなりますから略しますが、武將といふ武將で戦の上手であつたといふものは、全部忍術に依つて勝を得たといつてもよいと思ひます。何時の時代でもさうですが、先づ凡ての調査をやつておいて、色々の事情や情勢を知つて、事に當れば、それだけ事業もうまくいくわけでありまして、昔の諸將が忍者を巧く使つて、その戦を巧く行つたことは當りまへのことです。その忍術を使つた主なる武將を擧げて見ますと、第一は源

毒ガス使用の先驅者

義経で、この義経は鞍馬山に於て鬼一法眼より黄石公の兵法忍術を學んだ。この黄石公の方法は今の「素書」といふ本にありますが、これを學んだ。それですから、例の五條の橋上で辨慶をやつゝけたのをはじめ、幾多の戦に於ても、あれ程上手に戦かつたのであります。

この五條の橋の戦なんか、面白いからお話しますが、よく皆さんは、年若の牛若丸がたつた扇一本で、武藝に長じてゐたあの辨慶をやつゝけたと思つてゐる方がありますが、あれは武術だけでやつたのではない。むしろ武藝より忍術の一法たる霞扇の術を使つたものであります。これは又日本に於ける毒ガスの一番初めのものになると思ひますが、「霞扇の術」といふのはある三種の薬―これはその粉薬が目鼻口に入れば急ち人は倒れる―その薬を扇の片面に入れて

置いて持つて居り、若しも敵が近付いて身に危険が迫ると見ると、直ちにこれを擴げて煽ぎつける。するとその粉薬が敵の目鼻口に入っているから、忽ち氣絶する。この霞扇の術に辨慶がひつかゝつたわけであります。徳川時代ある劍道の先生の中には、この薬を袋竹刀の中に入れて置いて、柄の方を握ると先の方から飛出すやうな仕掛にし、互に正眼に構へて向ひあつた時にシュツとやつて直ちに相手を氣絶させ、これを睨倒しの術等と云つたものもあるやうです。只今でも二、三の流派の武術の中に残つてゐるやうですが、丁度仁丹の丸薬を二つ合せた位の丸薬で、自分に危険が迫ると、それを火鉢の中に投込むと、シュツとそれから煙が出る。その煙を嗅いだ瞬間相手が倒れると云ふやうな毒ガス薬がありますが、随分研究されたものです。これらは現在毒ガスの研究などにも

最古の忍術傳書

使はれて居るものでありまして、用法はそれを申しますと誰方でも出来ることになりますから避けますが、毒ガスの歴史から見ますと、外國よりも日本の方が先ではないかと思ひます。

とにかく源義経はさういふ術に長けて居つて、鴨越の逆落しにしましても、又壇の浦で例の能登守に追ひかけられて八艘飛びをして逃れたといふやうな事も、皆忍術の一法によつたものであります。又、義経の家來の伊勢三郎義盛は忍術の達人でありまして、今、日本の忍術の傳書の中で一番古いのは、この伊勢三郎の書いた「義盛忍歌」といふのであります。これは百首の歌の中に忍術の極意を織り込んだもので、百首の歌さへ讀めば、忍術は或程度までは判る。その伊勢三郎なんか、義経の側についてゐて謀を廻らした。

楠正成と忍術

その次の時代の人で忍術の巧かつた者は誰かと云へば、例の楠正成で、正成は忍術者のことをスツバと呼んで居ります。これは、透破と書いたり、水破と書いたりしますが、スツバと呼びまして、四十八名のスツバ、即ち忍者を常に十六名宛の三組に分けて、これを京都、大阪、神戸などに派して、常に情報を得て居つたので、かの智略縦横の戦の巧く出来たのは、さういふ者の爲であるといふ事を言つて居ります。

先頃上海戦線などで、楠正成が例の薬人形を作つて敵を謀つたやうに、支那兵がさう云ふものを作つて居るといふ事が新聞に出て居ります。尤もそれを楠流など、書くのは、怪しからぬことと思ひますが、このやうに、楠正成は非常に面白い方法を澤山使つてゐる。或る時なんかは、敵城に攻入る時に、敵兵が

忍術者の異名別稱

兵糧を取りに行つたその歸途を邀して、その兵糧を擔いで来る奴を全滅させて彼等の著て居つた所のものを身に纏ひ、分捕つた兵糧はとつて、その中に自分達の鎧や武具を詰めてそれを擔ぎ、ゆう／＼城門近くに近づいた時に、後方より敵方の楠勢が急追したと見せかけて、開門／＼と叫んで中に入り込み城兵が城外の楠勢と戦ふすきに、鎧に着換へ内外相呼應して城を落し入れた等、實に謀計に長けてゐた。

かうしたことは凡て水破によつたことであります。この水破は本によりますと素破とも書いてありますが、これは皆様もよく使はれる言葉で、「お前愚圖々々云ふと素破抜くぞ」など申しますが、この素破抜くといふのは、その人の不利益なる裏面内容を知つてゐる人がそのことをさらけ出し、その人を不利な

立場に導くといふことで、一種のスパイするぞといふ言葉を楠流でおどした文句であらうと思ひます。

なほ藤原時代以後、戦国時代にかけては忍術のことを關東の方では亂破、或ひは突破と云ふ名で呼んで居ります。それから、又「草」「かまり」(うかみ人)「忍」と云ふ名前と呼ばれて居ります。武田信玄は之れを三者みつものと呼んで居り、間見、見分、目付の三にわけ、上杉謙信はこれをのさざる猿、織田信長はきょうたん饗談と稱し、盛んにこれを用ひて居ります。

ところで面白いことは諸將の中にも、忍術を特に好いた人と、好かない人がある。用ひた人と用ひない人がある。一番忍術者を愛した人物といふのは、例の徳川家康で、家康はこれを隱密と呼んで居ります。徳川が三百年の太平を

忍術者を愛した徳川家康

保つたといふことは、之れは與つて忍術者——隱密の力によるものであつたと申して差支へない。それには斯ういふことがある、家康が信長の招聘に應じて天正十一年泉州境に至り飯盛山の陣地に宿してゐた時、例の本能寺の變が起つた。これを茶屋四郎次郎が早馬で家康のもとに急を知らせて來た。家康は後年には狸親爺といはれたけれど、その當時はまだ純真だつたと見えて、日頃恩顧を蒙つた信長の爲に敗る迄も一戦を交へやう、若しならずんば自分は智恩院で腹を切る迄だと、僅かな軍勢を本能寺に向けようとした。しかしこの兵亂で野武士が蜂起し、そこ迄行つて戦ふはおろか道が危い、それを知つた本多忠勝が今行つては危いから一度三河まで歸つて後に兵を擧げてからでも遅くはない。一切に思ひとゞまるやうにと諫めたので、家康も一旦三河へ歸つて兵を擧げるこ

伊賀者・甲賀者

とにしたが、その途中がどうも危い。そこでついてゐた服部半蔵、柘植三之丞、穴山梅雪などの斡旋で、伊賀、甲賀、二百人の忍術者を招いた。そしてそれに途々を警固して貰つて鹿伏兎といふ所を越え、伊勢の白子を通つて三河迄歸つて来た。これは徳川家康の三大難の一つである。

その縁故からして、後ち天正十八年、江戸に居城を構へるに及びまして、家康は服部半蔵以下二百人の忍術者を呼びまして、これに邸を興へ、祿を當てがつて、隠密役等をつとめさせた。

只今四谷に伊賀町といふのがありますが、あれはその時に来た伊賀者を置いたので、この町名が出来たわけです。又甲賀者を置いたのが、神田の甲賀町であります。それから麻布の筭町——これは下輩の忍者を置いた處で、橋を距て

半蔵門の來歴
と徳川の隱密
政治

て甲賀者と伊賀者を住まはせ、その橋を甲賀伊賀橋、その町を甲賀伊賀町と言つたのが、段々筭橋、筭町といふ名前に變つたわけであります。

その當時、その首領であつた服部半蔵が護つて居つた麴町御門が半蔵門となつたのである。今の半蔵門を、よく市バスの名所案内人がとんでもない間違を言つてゐる、それはお乗りになつて見物をなさつた方はお聞きになつたこと、思ひますが、「この半蔵門は昔將軍様に象を御覽に入れようとして、こゝまで連れて来たが、この門を半分しか入らなかつたので、それで半象門と言つた」など、説明して居りますが、これは服部半蔵が守つてゐたので半蔵門といふのであります。

この半蔵といふ人は大變力が強く、五間程の槍を持ち、力は五十人力とか云

つて、鬼半蔵と言はれて居りますが、その半蔵がこの門をすつと守りまして、あと二百人の忍者には忍目付といふ名前をつけて、これをお庭番といふ形式でもつて、諸國の隠密役をさせて居りました。その隠密の鎮^{おさ}役なんかやつて居たのが私の先祖であります。

この隠密が徳川の一つの政治の方法であります。例へば將軍が毎日庭を散歩なさる。その時、お庭番として入つて居ります忍術者を呼んで、これに命じてどこへを見て来いといふ。するとお庭番は箒をその場にすて、そのまゝ三年間の猶豫をもらつて諸國の情勢を探りに行つたものであります。徳川が三年の太平を保つたのも、この隠密網が、只今の警察網のやうにはられてゐたからであります。

忍術者を愛さなかつた豊臣秀吉

これに反して、最も忍者を愛さなかつたのは誰であるかといふと、豊臣秀吉であります。秀吉は非常に小さい時から、所謂忍術といふものに馴れて居つた様であります。その例としましては、御承知の如く、蜂須賀小六の乾分になつて泥棒に入つた時なんかには、自分が追ひかけられて危険と見ると、直ちに、石を抱へ込んで、井戸の中に落し、アツと聲を立て、その方に相手の氣を配らしておいて逃げたり、又小六が俺の刀を盗つて見ろと云つた時に、秀吉は自分の被つて居る笠を雨だれのところに當て、小六がその方に氣をとられて疲れて居睡りをしてゐる時に、背後から廻つて、その刀を盗つたといふことがあります。

この水を利用する事を俗に水遁と申して居ります。即ち忍術には五遁の術が

あると云つて木火土金水に分けて居ります。支那の五雜俎といふ本の中に書いてある「火によりかくるゝを火遁と言ひ、水によりかくるゝを水遁と言ふ」と云ふ文句からよく判りもせず、かの瀧澤馬琴が一世の麗筆を揮つて「大約隠形に五法あり、第一を木遁といふ、樹に倚る時は形を隠して敢て亦顯さず、第二を火遁といふ、第三を土遁といふ、第四を金遁といふ、第五を水遁といふ」處から書き出して例の犬山道節を躍らせる爲に書いたものを、他のものゝ判らない連中が一緒になつて、五遁の術など、申したのでありますが、前にも述べた通り、本當は五間の術と申すのでありますから、秀吉のやうに水を利用しなすのを水遁の術と言ふのは出鱈目で、これは雨鳥の術と言ひます。そんな風に秀吉自身非常に忍術が巧かつたのですが、石山寺の戦の時に忍者の爲、裏切ら

伊賀流・甲賀流
と其諸分派

れたといふところから、餘り忍術者を愛さなかつた。これが豊臣氏が一代二代で亡びた原因ではないかと思ひます。かくの如く忍術といふものは古い歴史を持つて居り、現今でも盛に行はれて居るのであります。

【三】 忍術の諸流派

さてその忍術の流派はと申しますと、甲賀流、伊賀流、これは二大流派であります。この二大流派の外に芥川流、根來流、扶桑流、忍甲流、甲陽流、紀州流等、凡そ大流を分けて二十五流といはします。しかし總ての流派は甲賀流伊賀流の二大流派から分れたものであります。この流派の名前はもとゝゝ流名

ではなかつた。忍術の盛になりました濫觴の地といふのは滋賀縣の甲賀、そして三重縣の伊賀であります。これらの土地は地勢上非常に險阻な山に包まれてゐて、その狭い僅か五百坪か千坪ほどの處に城廓を築いて郷士を氣取り、これが一朝風雲に乗じては全國を平定しようといふやうな意氣込みで、互ひに情勢を探り戦つてゐた。従つて忍術者又はスパイをする連中が非常にこの温床の上に育まれ、密偵潜行の術に馴れたわけであります。そして足利義尙の釣の陣の折、諸國諸大名の前で、拔群の功を現したのが伊賀者、甲賀者といふ名が出る初めて、伊賀、甲賀は忍びの術に長けて居つたといふところから伊賀者、甲賀者が伊賀流、甲賀流の流名になり、その伊賀流が四十九流に分れ、又甲賀流は五十三流に分れたものであります。

現代の忍術者と
忍術衰微の
理由

それだけ澤山あつた流派が只今ではなくなつてしまつて、私一人になつた。私は甲賀五十三家の内の二十一家南山六家の一和田伊賀守から十四代を繼承した者であります。只今では私が一人居るだけであります。これはどういふ譯であるかと云ふと、忍術といふものは頗る危険な術であります。まさか印を結べば忽ち身體が消えてなくなつたりはいたしません。如何に科學が進歩しても消えるものではないが、しかし忍者と申すものは、拇指と中指を伸して廻しただけ、即ち五寸か六寸の穴があれば出入できるのであります。又拳骨一つあれば普通の銃前位外すのは何でもない。手提金庫くらゐは、拳骨一つでいくらでも叩き割ることができます。又入らうと思つた所は、いくらでも入ることが出来るし、出ようと思ふ所はいくらでも出られる。私の家なんかいつでも鍵はか

けて居りますが、鍵は人のためにかけるので、私自身は鍵はあつてもなくても自由に入入りしてゐます。とにかく便利でもあり、危険でもある方法であります。忍術の一法の中にはわづか拇指の先位の薬品があれば、眠らすことも、そのまゝ天國に送ることも、涙を出させることも、嘔を出させることも自由自在に出来るものもあります。

つまり今の催涙ガス、ホスゲン、臭化ベンデル、イペリットと同じやうなものも幾らもある。暗殺なんかの爲には、たゞ一滴の液体で、その水滴を皮膚につけるだけで一分五六十秒で、その人の心臓の血液を結晶せしめるところの薬品などもあつて、恐るべきものもありますから、これをつまらない者に教へては非常に危険であります。古來さういふ者がありますが、悪い心を持った者が

これを利用しようとすれば、石川五右衛門位の下手糞なことなら、いくらでも出来る。これは危険でありますから、その方法は厳秘に付したものであります。現今でもスパイの術といふものは、御承知の如く頗る秘密であります。昔は「あれが忍者だ」と云ふやうな取り沙汰をした者は殺すといふ方法をとつたものであります。それでかうして皆さんにお話します所のものだけでも、これが昔ならお話すると私は勿論暗殺されるが、皆さんもお歸りになるまでには全部やつ、けなければならぬといふ工合に、總てを厳秘に付した。たとへ自分の子供であつても、これが忍術者の資格がないと見るならば、絶対に傳へない。随つて若しも自分の繼承者のない時は、傳書一切火中に投じて後を絶つ。だから忍術の傳書など現在少いと云ふ事は、このやうに焼き棄て、了つたり、

又方法等も人に語つてはいけなさと嚴秘に付した爲であつて、さういふ事が忍術の廢れる一つの理由であつたと思はれるのであります。

第一の條件、正義觀念の強いこと

三 忍術を學ぶには

【一】 忍術者たる三要素

それで昔から忍術者となるのには非常な人物試験があつた。忍術を教へる場合、三要素と云つて、次にお話するやうな資格のない者には絶対に教へない。

三要素とは何かといふと、先づ第一に正義の觀念の強い者でなくてはならない。前申す通り忍術は頗る便利な術であるが、危険な術でありますから、正義觀念のない者には絶対に傳へない。又御承知の如くスパイといふものは、自分

第二の條件、
頭腦の鋭敏な
ること

の身に國家の或る秘密命令を持つて敵國に潜入し、敵の機密を探る役でありますから、萬一大義名分を辨へず、私利私慾に迷ふやうな徒輩であつたならば、少し金を握らせられたり、前述の「くノ一」即ち女に籠絡されたりすると、敵方に行つて逆スパイとなつて、自國の秘密を洩らしたりする。こんな事があつては、とんでもないことになりますから、忍者になるには、首がちぎれても、私利私慾に迷はぬ正義の士といふことが、第一の條件であります。

その次には、頭のよいことが條件となつて居ります。何故頭のよい者でなければならぬかといふと、敵の情勢を探り、或は視察して來るといふ時、たゞポカンと見て來るのではいけない。一遍見たゞけで、直ちに吞込み、現在はいかうだが、次はあゝなるといふやうな事まで細かに推察出來る者でなければならぬ。

い。そこで直覺力、推理力の強い者で、判斷力もあり、更に記憶力のよい者でなければならぬ。例へば城なら城、兵營なら兵營を調べる時に營門に入つてから、兵舎の配置がどうなつてゐるか、兵器彈藥庫は何處にあるか、幹部室は何處かといふことが一見して判り、しかもしつかり憶えて來るものでなければならぬ。

それから目測が出來なければいけない。何間何尺あるといふことが、物差を持つて來なければ判らないと云ふ人ではいけない。よく千代田城の濠に石を投げ込み、煙管なんかで測つてゐる丸橋忠彌の話がありますが、あれは城の目測と、音による觀測等でありますが、兎に角、城の状態などは歩測によつて測ることがあります。歩測といふのは、一歩いくらあるか、自分の足の幅が何尺あ

目測の巧みな
こと

物の利用に巧みなこと

るかといふことで、斯ういふことまで忍者はしつかり頭に入れて確定して居ります。つまり歩くことが物差になるのであります。さうして城門に向ひまして、歩數で測つた。距離によつて三角法を用ひまして城門の高さとか、すべての情勢を探るのであります。今でも土人なんか高い所を測るのに、さういふ方法をとつて居ります。さういふ目算が出来なくてはいけない。

同時によく頭を働かせて、物の利用といふ事をやる。例へば或る町の情勢を探つて、家は何軒ある、空家が何軒あるといふことを調べるとする、その時なんか、たゞ町を歩くだけで観測することは一寸出来ない、直覺では出来ません。この時は、調べる家數がおほよそ八百軒位あると思つたら、千個ぐらゐの豆を兩方の袂に入れて行くのです。そして自分の観測すべき家が右側にあれば

右の袂の豆を一つ食ふ。左側にあれば左側の袂の豆を一つ食べる。同じ調べて歩くにも、一生懸命目をつけて歩けば「彼奴の目付は怪しい」といふことになりませんが、豆を食ひながらブラ／＼歩いて行けば、先方は油断します。さうして歸つてから残りの豆の數を調べれば、自分の観測すべき家の數が判るわけです。

この物の利用と言へば、忍術の中には萬一危険だと云ふ時には、總てが自分の武器にならなければならない。水一杯によつても自分が助かる事が出来る。どうするかと云ふと水を自分の脇に置いて、危険が迫つた時、口に含み、急にフツと霧を吹きかける。それを避けようとする際に餘りの水をしっかけ、次に飛びかゝつてやつ／＼けると云ふ様にすれば、水一杯でも非常な武器になる。ま

何故あの場合
頭を使はなかつたか

た煙草一本でも武器になる。

話は横道に入りますが、例の大森の銀行にギャングが入った時なんかでも、私はどうしてあの銀行員が頭を使はなかつたかと残念に思つた。銀行員は人の生命の次の財産を預つてゐる大切な責任があるのですから、あゝいふ時はもう少し落ち着いて適當の處置をとらねばならぬ。前の方でピストルをつきつけられてホールド・アップしてゐる人は仕方がないにしても、その後方にゐた人が何故自分の武器を有効に使用しなかつたか。事務をとる人には、ペンやインクが立派な武器であります。そんな武器をなぜ役立てぬかと云ふのです。犯人が逃げて行く時、後から青なり赤なりのインク壺をぶつつける。これが銀行なんかでは一番よい方法です。賊が逃げた後で、直ぐ警察に電話をかけて今ギャング

記憶力のいふこと

が入りました、そのギャングは背中に赤インクをつけて居ります。それが犯人ですからお手配願ひますといへば、忽ち檢舉の端緒となります。

記憶力の正確といふことの必要なのは、忍者は決してノートすることが出来ないからであります。今でもスパイは絶対にノートしない。何故ノートしないかといふと、この書くといふことは、若しも敵に捕つた場合、一つの證據物件になるからです。だから、絶対にノートしない。凡て自分の頭に憶えておく。この憶え方にも澤山方法があります。忍者の方では面白いことを言つて居ります。人がノートして置かうとか、帳面に頼らうとするから、物を忘れるんだ、自分は自分に頼らねばならない。又物覚えの悪い人間のことを、今の言葉でいふと、カメラが悪いと申します。つまり頭はカメラでありまして、眼はレンズ

第三の條件、
と身體のいゝこと

で眼ばたきはシャッターだ。レンズを向け、シャッターを切つた時、既に見たもの、聴いたもの全部、このカメラに映像してゐる。それを現像の仕方が悪いから、二重寫しや三重寫しになつて頓珍漢になる。それでは何にもならない。さういふわけで頭のよいこと、即ち推理力、直覺力、記憶力がよいことが第二の條件となるのであります。

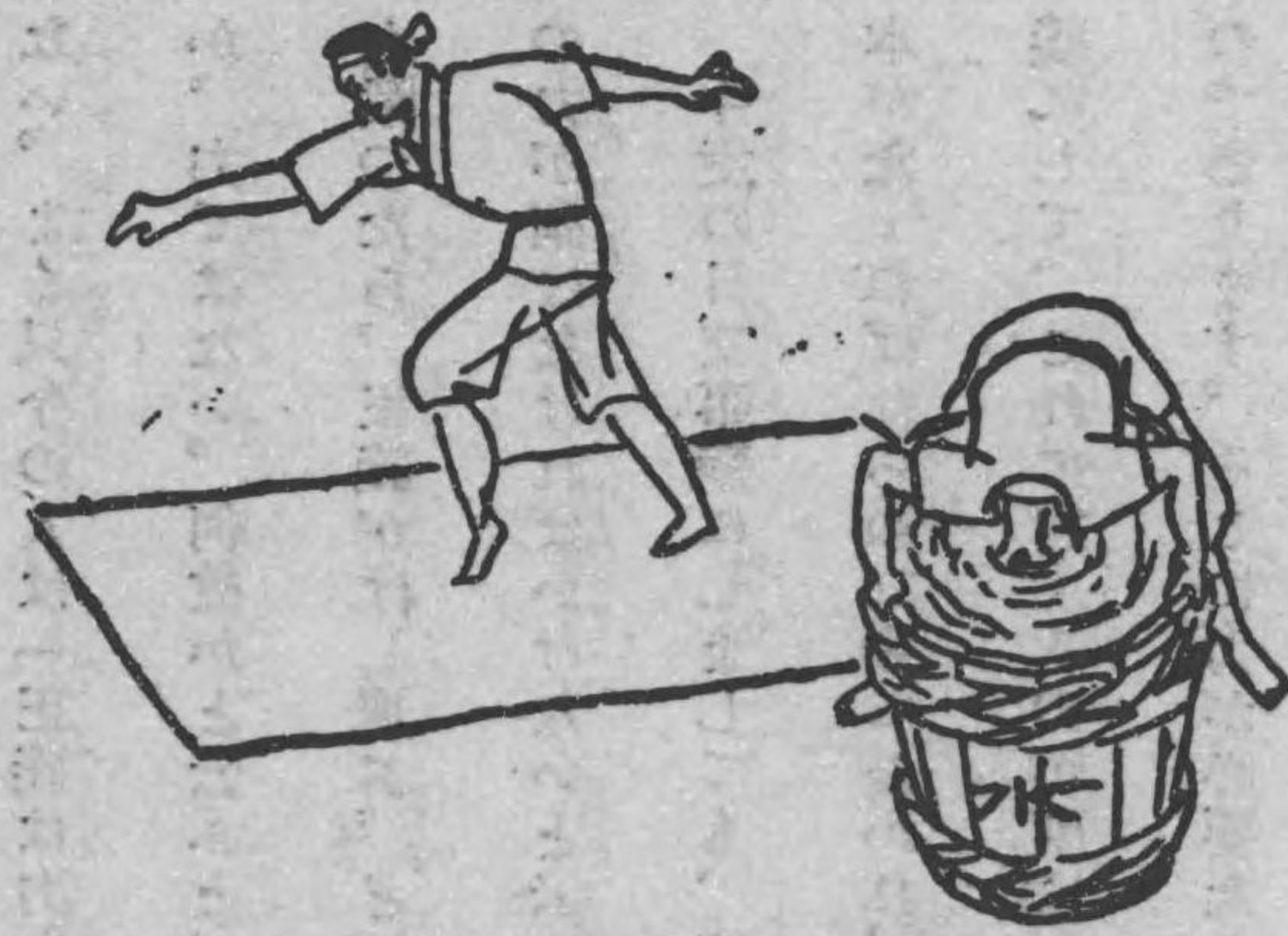
第三の條件は身體のいゝ事であります。忍者と云ふものは、身體がよくなければいけない。今の人間がさうですが、頭がよくて、極く正直であつても、學校がどんなによく出来ても、又その人間がどれ程の人物でも、それを實行する力、即ち體力がなければ駄目である。忍者も亦、實行力——體力がなければ、その資格がないとして居る。身體が丈夫で、少しの寸隙があれば直ちにつけ入

り、危険なりと思へば、直ちに退出するやうな、極く敏捷な者でなければいけない。よく只今の人は「正義は力なり」と言ふが、忍者の方では、正義なんか、力ではない。何故かと云ふと、これが正しいと云つても、何を云ふと、ぶん殴つたら、正義がけし飛ぶ。どこまでも、正義には、それを實行するところの力が副はなければいけないと云ふのです。

今度の日支事變にしましても、彼の暴戻なる支那が日本に挑戦したので、日本がた、ねばならぬ立場におかれ、止むなくたつた様なもの、この日本の正義にして、これに對する力が副はなかつたなら、決して戦勝は得られなかつたのであります。そこに力が必要なのであります。

随つて忍者の資格としましては、あだかも豹のやうな剽悍な身體をもたねば

水の中で呼吸
を我慢する



ならぬのであります。

上は濡れ紙の上を渡り
下は水中に突込み呼吸する

【三】 忍術修業第一歩

以上の三要素を備へた人間を、初めて忍術者の候補として試験をする。試験は只今でも色々銀行會社などでやりますけれども、昔のスパイの試験といふものは少々變つてゐる。どうするかといふと、すらすらと並ばせておいて、その前に水を一杯に張つた四斗樽を置いて、前に居る者から

濡れ紙の上を
渡る

順繰りに引張り出して、水の中に首を突込ませる。規定は十五分間となつて居りますが、十五分といふと却々難しい。とにかく滿々と水が充ちてゐるところへいきなり引摺まへて首を突込まれると、大抵の者は愕いてブル／＼と首をあげたりする。さう云ふやうな者は落第で、要するにいつまで首を突込んでゐられるや、その時間の長い者ほど及第者となる。十五分は却々出来るものではありませんが、さういふ處にレヴェルが置いてあるから、この試験は難しい。これに合格すると、次は唐紙を寝かした上で紙を張つて水をバ／＼と撒いて破れ易くしておいて、これを渡らせる。この時、紙を踏んで破つた者は落第破らずに渡れた人間は及第生となつて居ります。吾々の先輩には巧ひ人があつて、障子の棧や紙を破らずに上まで駆け上つたり、鴨居なんかのところを落ち

と荒い息をやるから、何處に隠れてゐても自分の息で發見されてしまふ。忍者はどんな場合でも息が弾まないこと、自分の息が自分で聞えない程度、だから他人ひとに聞かせない事は勿論であります。これにはどうするかといふと、初めは雁皮の様に薄い紙を鼻の先につけて息を練習する。最初は大抵の者が呼吸をすると、これが上つたり下つたりしますが、終ひには綿屑のやうなものを鼻先につけても微動だにしない。それほど細かな呼吸まで出来るやうになる。この呼吸が出来るやうになりますと、「死生命あり」といふ一つの悟りを開く、死生命ありとはどういふことかと申すに、これは人事を盡して天命を俟つといふことであります。多くの人は普段は大きな事を言つて居るが、何かの事に遭遇すると直ぐ呼吸が弾んだり、又は顔色蒼然となつたりする。それではいけない。

人事を盡して
天命を俟つ

忍者は普通の武士と違ひまして、普通の武士では敵の包圍の中に立つといふことは最も不幸な場合であります。忍術者の場合は、この敵陣中に即ち危険な袋の中に入つて、その中のものを探つて來なければならぬ。敵陣中の最も危険な所に長く在つて、之れを脱出して來ることが忍者の勤めであります。隨て忍者はどんなことがあらうとも、一聲も上げない。今殺されるといふ時も、從容としてあだかも立ち石の如く死するといふのが忍術の方の教へであります。人間といふものは、彈丸の來る前線にあつたからと云つて、必ず死ぬものではない。同時に又後方にあつたからと云つて必ず生きるものでない。要するに自分の天分、自分の任務を盡すところに武士の本分、眞の本分といふものがあるのである。この一つの悟りを開きまして、人事を盡して天命を俟つのでありま

一日四十里

す。

【三】歩 行 術

次には何を練習するかと申しますと、歩き方があります。これには基本の三法がありますが、これは足を練磨するのです。先づ爪先で立つ練習をする。爪先でいくら歩いても痛くならぬ練習をする。又足の横で歩く、足首がどつちへでも曲る。それからダンスの「瀕死の白鳥」などでやるが、兩足を一直線にする。かうして足がどんな風にしても折れないだけの練習をする。次に歩き方でありまして、六法あります。前に歩く方法、斜めに歩く法、後に退る法、横に歩く法、這つて歩く方法、それから速歩の六法がありますが、普通歩くのが一

横歩法・還歩法

時間に四里となつて居ます。一日十時間と見て四十里、これは一番下手な者でも歩きます。中には三十五里の道を往復して来る者があります。七十里であります。中里介山の書きました「大菩薩峠」に、が、ん、り、き、の七兵衛といふのが四十里歩きますが、これ位の事實はあつたのでありまして、確實に七十餘里歩く者があつたのであります。それからその歩く速度は胸に菅笠を當て、これがすり落ちないといふ程度とされて居ります。

横歩きはどういふ時にするかと云ふと、例へば細い隙間などがあれば、普通には歩けないが、横歩きだと、身體の厚さだけの隙があれば歩けるのであります。この横歩きは足をX字形に交叉して歩くので、一步が普通の歩き方の二歩に相當します。しかし普通のやうには歩けませんから、一日三十八里が規定で

暗闇で物を見る法

あります。又敵前で歩くのに、この横歩きは非常に便利であります。前と左右の三方に敵を受けた場合、壁なんかに沿ふて、前方と左右の敵を斬り拂ひ乍ら歩くことが出来るのであります。

這つて歩く方法は、刀の柄を前に出して、それと並行して歩くのであります。これは夜暗い處を歩く術であります。

忍術者は暗闇で物が見えなければいけない。皆さんは暗闇で物が見えるものかと仰しやるでせうが、忍術者の方では暗い處で物が見えんなんていふと、片輪者だと云はれる。吾々の視覚神経の細胞といふものは、圓柱體と圓錐體——この二つのものから成立つてゐる。圓柱體は暗い處を見る神経細胞で、圓錐體は明るい處を見る神経細胞である。従つてこの一方が缺けてゐるもの、例へば

鼻の如きものは、圓柱體だけで圓錐體がないから、暗い所だけ見えて明るい所は見えない。反對に鶏なんかは圓錐體だけで圓柱體がないから、明るい處は見えても暗い所は見えない。猫などは兩方備はつてゐるから、どちらでも見える。人間でも光を消して暫く透して見てゐると、どうやらかうやら、或る程度まで見える。これは圓柱體も圓錐體もあるからで、鳥目なんかになるのは、圓柱體の缺乏する病氣であります。人間も明るい方ばかりで暮して居りますと、圓柱體が段々退歩する。昔は行燈だとか、ランプによつて暮してゐた。それが照明機關の進歩に伴つて段々贅澤になつて來た。電燈でも初めは五燭燈で随分明るかつた。然るに近頃では百燭つけても、まだ暗いと言つてゐる。これは要するに明るい處に馴れ過ぎたからなのでありますから、暗い處で物を見ること

に馴れる練習をいたします。

これには前申した這つて歩くことが便利なのでありまして、人間はこの首の後ろの方を壓迫すると、視神経の働きがよくなるのであります。それで這つて首を上げて物を見ると、暗闇でもよく見える。この這ひ歩きは、今日の如く防空法なんかが発布されましたやうな時代には、何人も心得ておくべき事柄であります。瓦斯マスクなどを用ひましても、あれは暫く経つと、その性能がなくなるのであります。それで昔から火事場や、或は瓦斯などに對しては、濡した布を鼻口に當て、這つて歩けといふことが云はれる。山本勘助の兵法奥義書にも夜の戦は必ず這つて見よといふことが書いてあります。

飛降・幅飛・高飛

【三】 跳躍・飛躍術

次は飛び方です。飛び方の中、高い處から下に飛び降りるのは、忍術者の方では五十尺を定法とします。私は下手で四十五尺しか飛ばません。幅飛びは三間、高飛びは九尺といふことになつて居ります。但し、今のオリンピック式の飛び方ではいけない。オリンピック式は向ふの方から走つて来て、即ち反動をつけて飛ぶ、而も尻餅をついても、その所までを何メートルと計る。忍者の方ではスポーツではありません。武術であります爲、轉んだりするやうではない。勿論助走なんかない。そのまゝ飛んで三間、そのまゝ飛上つて九尺飛ばねばならぬ。免許皆傳をとる者などは、六尺の屏風を立て廻した中に坐つて居



古稽ぶ飛を上るの麻

て飛んで出たり飛んで入つたりしなければ、免許皆傳をくれなかつた。これに
 はどういふ練習をしたかと申しますと、只今の選手がやるやうな、あんな生や
 さしいものではない。一坪の地面
 に麻の實を蒔いて、これを三年間
 繰返して飛ぶ練習をするのであり
 ます。降つても照つても濕つても
 三年間は毎日繰返して練習する。
 麻の木といふものは非常に生長の
 早いものでありますから、麻の生
 長力に正比例してジャンプが巧くなる。よく「榮冠涙あり」などい云ひますが

駈け方の練習

成程そこに苦心がなければいけない。
 現代の選手にしましても、学校の片手間に練習して、いゝ加減になつたから
 と云ふので、選手だとか何だとか云はれていゝ氣になり、女にうつゝを抜かし
 たり、酒を飲んで不養生をしながら飛ばう、と云ふやうでは、立派な選手には
 なれない。「榮冠涙あり」といふのは、そこをいふのではないかと思ひます。忍
 術者はさういふ苦心をして練習をする。
 それから次は駈ける練習ですが、これは皮の衣を着けて駈ける。何故かとい
 ふと、汗を掻くと皮が段々縮つて来て苦しくなる。現今でも皮手錠などいふ刑
 具がありますが、それをつけて水をぶつかけると段々縮つて来て苦しいもので
 あります。かうして汗を掻かずに走る練習をする。同時に一反——二丈八尺の

る。吾々もさう考へて居つたが、忍者の方では、それが出来なければ、萬物の
 靈長と云はれないと言ふ。「貴様は何故、ラッコや獺や海豚に負けるんだ。彼
 等でさへも呼吸するぢやないか。出来ないのはやらないからだ」と云ふので、
 ...此の如く口あり
 水時へ
 中口筒
 忍に筒
 ぶわく
 五日、一生を通じて一つの練習
 これは毎日々々、一年三百六十
 をする。この一つの練習と云ふのは、朝洗面の際に洗面器の中に水を一杯張り
 その中に首を突込み、苦しくなるまで入れては出し、入れては出し、水の中
 中で呼吸をする練習をする。さうして居る中に段々に水の中の呼吸が楽になる
 だから昔の忍者なんかは、水の中で十分、二十分、三十分位はどうか呼吸で
 きる。中には危険の際には刀の鞘を口にあてがつて、それに依て呼吸すると云

忍び泳ぎ



圓るみでん忍く長に中水てへわくに口を具道

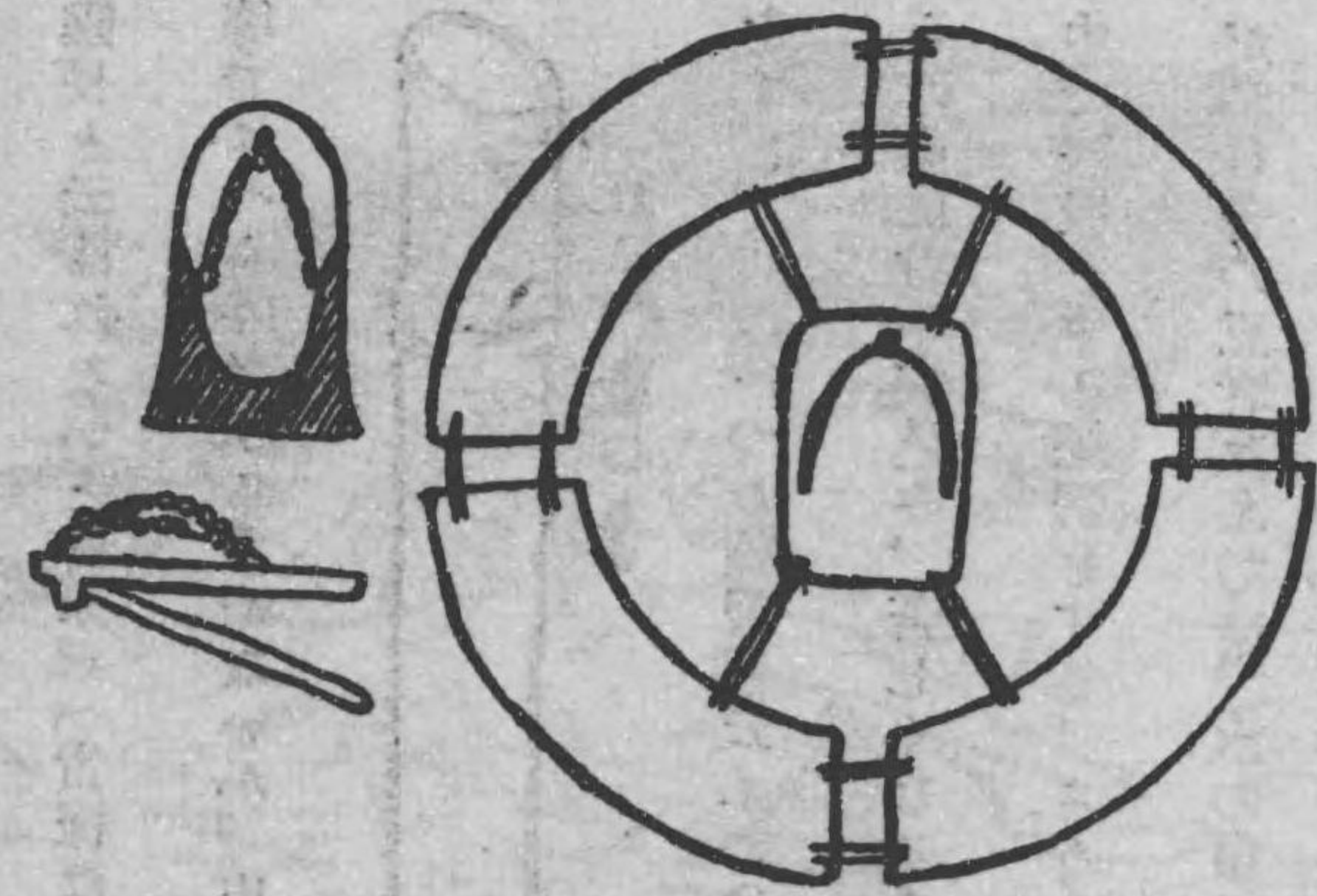
布を首につけて、それが地面につ
 かない程度に駈けねばならない。
 その練習をします。

【四】潜水術

次は水の中で泳ぐ練習でありま
 す。これを忍び泳ぎと云ひますが
 ドボンと飛込んだら、水の中で呼
 吸が出来ねばならぬ。水の中で呼
 吸が出来ますかと云ふ人が澤山あ

身邊事物を臨
機利用する心

ふ方法をやつたのです。總て物の利用をやつた。



具遊るふ用にく歩を中水

かに火事があつたやうな場合はどうするかと云ふに、さういふ場合はパラシュ

これも序でだから申しますが、火事
 なんかあつた時でもさうです。上から
 飛ぶ場合には、忍術者は羽織を着て居
 る時には羽織を擴げて飛ぶ。さうすれ
 ば、これに風を受けますから、幾らか
 樂に飛ぶことが出来ます。羽織のない
 時は、風呂敷をくはへてやれば樂に飛
 べます。そんなら只今の高層建築なん

ートを使ふのであります。パラシュートの代用は澤山にある。それは何かとい
 ふと、あのシートです。そのシートを腰に結へつけて飛べば樂に飛べる。或は
 ステッキなんかがある時は、ステッキを今のシートの片方に結へつけて飛べば
 これに風を受けるから樂に飛べる。又カーテンを利用して、これに依て立派
 なパラシュートが出来る。かうして、あらゆる場合に、忍者といふものは物を
 利用する。

水の中で呼吸が出来るばかりでなく、水の底を歩く方法、中間を泳ぐ方法、
 水の上を絶対に水音立てず、死んだやうにして流れる方法、さういふ練習をや
 ります。

吾々の先輩で伊賀流の人なんか、非常に泳ぎが巧かつた。この人は幕府に仕

へて居つたが、祿を離れたから仕方なく、お濠に飛込んで鯉を獲つて生活した
これなんかドボンと飛込むと、顎に一尾、兩脇に一尾宛、兩手に一尾宛、股に
一尾と、一度に五六尾も獲つたさうです。その位に泳ぎが巧かつた。

逆手の練習

五 心身の鍛練法

この飛び、歩き、泳ぎの三法を練習すると同時に、五體の練習をする。それ
から内臓諸器官の練習、心身の練磨をやる。これには先づ逆手を練習する。今
の柔道なんかは逆手が弱いが、忍術者は逆を主とします。

【一】五體の練磨

私は柔道も剣道も五段をとりましたが、その當時、或る友達が——現在七段
になつて居りまして八段候補ですが、當時は私よりも一段多かつた。——その

友達が、「藤田君、本當の武道をやるなら喧嘩をやらねばならぬ。俺が模範的の喧嘩を見せてやるから来い」といふので、どうするかと訊くと、「あの三段の奴逆手をやるといふから、俺が一つとつちめてやる。よい加減とつちめたところへ君が出て来て止めろ」と云ふ。模範的の喧嘩をやるなら、これは有難いと思つて行つた。ところがこの友達がボンと突掛ると同時に悲鳴を擧げてゐる。悲鳴を擧げたのは六段の先生です。どうしたのかといふと、忽ち逆をとられて「貴様逆を用ひるのは卑怯だ」と云つてゐる。「指を放せ」。正々堂々とやれ、卑怯だ」と悲鳴を擧げてゐるのです。自分が喧嘩をふつけておいて、逆をとられたから放せ」と云つてゐる。どつちが卑怯だか判らない。忍術者ではいけないので、私などは指を逆に曲げても手頭にくつつく

武器なくして
敵を斃す練習

まで曲るやうになつてゐる。かうして終點まで曲れば、いくら逆をとられても平氣です。又手を捻られても、手頭をぐるぐる回轉させることが出来るから何でもないのであります。その他、どんな風に逆をとられても平氣であるやうに練習します。

次は武器なくして敵を斃す練習です。どんな風にするかと云ふと、この練習には一尺四方の箱を置いて、その中に砂を一杯入れる。そしてその砂の中に手を突込む。初めは入りませんが、段々やると手頭ぐらゐまで入るやうになる。すると今度は、小砂利を入れてやる。小砂利の次は粘土を固めてやる。その次は普通の地面までグサグサ入る様な練習をする。この練習は段々指の數を減じて、三本の指、二本の指、一本の指でも入るやうにする。

それから指先だけで、コンクリートのやうな固いものを碎く練習をする。この練習が積むと、今度は肉塊を引きちぎる練習をする。肉の塊といふものは、繊維が強くて引きちぎることはなか／＼出来ません。これが出来るやうになると、犬や猫の死骸を持つて来る。人間の死骸に越したことはないが、これは餘り手に入りません。その死骸を寝かして肋骨を狙つては、指先でむしり取る練習をする。或は肉を引きちぎり、臟腑を掴み出す。

かういふ練習をやれば、生きた人間でも二本の指の握つたところを引きむしるやうになる。私の一代前の祖父なんかは五寸徑の青竹の節のところを、両手で挟み打ちにして碎いたのであります。又竹をむしつたりしました。吾々には一寸出来ませんが、練習はやつて居ります。かうしていざ實戦といふ時には、

法練假の身心
法練假の身心
法練假の身心

相手の胸の鎖骨のところに指を突込み、そのままずつと入れて肺尖のところをむしり取る。咽喉笛でも何でも二本の指の觸れたところをむしり取るのであります。吾々の先輩には生馬の尻肉をとつたといふ話があります。これは決して誇張して云つてゐるのではない、本當のことです。二本の指で眼玉を抉り取る。三本の指なら人の頭蓋を碎くことが出来る。拳骨は大抵普通の枕ならば五分位凹ませる事ができる。この練習は、一つは武器なくして敵を斃すことが出来ると同時に、それによつて指先を強めるから、この指先の力を利用して五本の指のかゝる處は、どんな高いところでも登れます。指先のかゝつたところは絶対に放さない。天井なんか逆様にはりつく事が出来る。八疊の座敷なら、三分間あれば這つて歩くことが出来る。

最後迄闘ひ抜
くのが忍術者
の精神

今の連中は非常に弱いので、學生なんか、ボールなどをやつてゐる時に、一寸突指すると大騒ぎをする。撃剣なんかでも、今の連中は弱い。私の武道をやつた當時は、初めて行つた翌日叩きつけられて挫けた。すると「貴様、片手ぐらひやられて出来ない奴があるか」と言はれる。所が今は突指して挫けると、翌日は學校まで休む。あれではいけない。人の生命財産を守る警察官の中にもよく手を吊つて「今日は公傷です」と云つて居る。それで私は「武道には公傷はない」と云つてやる。眞の武道は片腕切られたら片腕、指一本切られたらまだ九本、二本切られたら八本ある。兩足切られたら轉つて食ひつく。首を斬られたら、これは見當が付かなくなるから仕方がないが――。

斯くして、どんなに叩かれても挫かれても、最後の最後まで戦ふといふのが

断食絶食の練習

忍者の精神であります。

【三】内臓の鍛練

この練習の次には、今度は内臓諸器官の練習です。

その第一歩は飯を食はない練習をする。忍術者即ち今のスパイといふものは敵地に入つた時は、何日間でも、情報を得るまでは、その場を立去れないことがあります。普通の人みたいに、腹が減つたから逃げ出すと云ふ事は出来ない。この時なんかでも十日や二十日食はないからと云つて参るやうな身體ではない。今の弱い連中が一日二日飯を食はないと、腹が減つては戦さが出来ないと言ふが、これは支那の言葉ではないかと思ひますが、そんなことではいけない

50。 學校を出たばかりの人などには、サイレン腹といふのがあつて、もう一寸で仕事が一段落つくといふのに、お午のサイレンが鳴ると、もう腹が減つて仕事が出来ない。サイレンと同時に腹がげつそりと減る人がある。これは非常時なんかには、とんでもない事だ。さういふ事は忍者の方では許されない。この仕事をしなければ、死んでもやめぬといふ氣概を持つのであります。これが世の成功者と不成功者の相違であります。ルンペンなんか、もう三日も食はないから、とにかく、何か食はねば仕事が出来ないといふ。かういふ食根性では進歩は出来ない。ところが、この仕事をやるまでは石にし噛みついて、餓死してもやるといふやうな人に限つて成功するものであります。忍者も亦その仕事

を成し果す爲には、何十日も食はないでもやり通さねばいけないといふのであります。そこで何日間食はないでも飲まないでも、平氣な方法を練習する。忍術の方では人は四十五日間飯を食はないでも、生きて居る事になつて居る。私なんか二十一日間の斷食はよくやります。さう申しても皆さんは「そんなに飲まず食はずにゐられるものではない」と仰しやるでありませうが、今回の事變におきまして不眠不休で三日も四日も、あの何萬といふ敵軍の中に突撃する皇軍の勇士の状態を見ますれば、よくお判りのことと思ひます。出来得ないと云ふ事はやらないからだといふ事を如實に示すものだと思います。忍者も亦、かうした斷食に堪えなくてはならない。然し、斷食といつても、

断食の爲の断食といふものは、忍術の方ではいけない。よく、そこらの下らない人間が二十一日間断食したなどと誇り顔にして居るが、断食はしたが、動けなかつた。これではいけない。忍者の断食は仕事の爲の断食、仕事を成し果す爲の断食であります。

その次は寝ない練習であります。忍者は十日や二十日寝ないと云つて参るやうではいけないといふのです。よく一晚眠らないと、翌日文句をいふ人がある。「鬼に角昨夜眠らないのだから……」と、すぐ仕事を休まして貰ふことを考へるそんな事では絶対に成功出来ない。忍者はそれ故に何日間寝ないでも、食はないでも、平然としてゐる練習をするのであります。

次にはその反対の、どれ程食つてもよい。どれ程寝ても平氣だといふ方法を

不休不眠の練習

食食の練習

練習する。忍者には陽忍と陰忍とありますが、陽忍といふのはあからさまに行動して情報を得る。陰忍といふのは、密かに忍んで身を現はさずに秘密行動を採る。これは今のスパイにしても同じであります。その陽忍の場合、例へばスパイがこゝで友達と食卓を圍んでゐる。そこに出ると同時に、もう一つ調べねばならぬことがあると、又その場所で食はねばならぬ、更に又次の所で食はねばならぬ、といふ必要がある。これはスパイに限つたことではなく、實業家などでも一つの宴會を済ますと、すぐも一つの宴會に行かねばならぬ、といふやうな場合、幾つの宴會でも御座れでなければ困るが、忍者はそれがとりわけ必要であります。

私の所では、書生が或時は二十四五人居りましたが、他の書生を引張つて來

いくらでも寝
続ける練習

て、「二三日飯を食はないさうですから、食はして下さい」と云ふ。それで食はずと、「そんなに澤山食べられるもんですか」と云ふ。人間位横着な動物はないと考へた事がありますが、食ふ時はどれ程でも食べなければいけない。

それから、どれ程寝つゞけてもいゝといふ練習をする。昔なんかは病人の如くに假病を使ふには、寝てゐて平氣な方法をとる。

これには一つの話があります。昔外國のスパイが一つの情報を得る爲に或る處に行つた。そこから自國に情報を齎さなければいけない。ところが警戒が嚴重で動く事が出来ない。その時、そのスパイは或日頭をクリ／＼に刺つて「あゝいゝ氣持だ。暑いから刺つたら、いゝ氣持になりました」と云つて居つた。すると翌朝から大熱を發して風邪引きとなつて、どうしても起きられないで寝

つゞけた。それで敵方でも心配して何とかして養生させなければいけない、と云つて居つた。その中に二ヶ月や三ヶ月の後頭髮が蓬々と生えた頃には癒つたが、しかしまだ養生をしなければならぬから、國へ歸ることを承諾して貰ひ度いといふので、何か秘密な通信でもないかと調べた。スパイは色々な處に通信文を入れるものです。蠟燭の中に入れてたり、煙草の中に入れてたりする。それだから何處かあるんじゃないかと云ふので審さに調べたが、何もなかつたので歸國させたが、そのスパイは歸國すると翌日は又髪を切つて了つた。見ると頭の地に通信文が書いてあつたといひます。即ち頭を剃つて通信文を書き、再び生えるのを待つ間、假病を使つて居つたのであります。忍者はさうした方法をとる。

「郷に入つては郷に従ふ」練習

次に、寝てもよし、起きてもよし、坐つてもよし、立つてもよし、自由自在に「郷に入つては郷に従へ」といふ事を練習しなければいけない。よく人はえらぶつて自分勝手な顔をするが、あれはよくない。柔道家でも、二段三位で肩を聳かして歩く奴に限つて、柔道がよく出来る奴はない。矢張柔か味がなければいけない。昔の話に何とかいふ仙人が羊の群に入つたら羊になつたと云ふのがあるが、さうでなく、羊の群に入つた時は、その羊に溶け込む。そこが忍者として必要な態度であります。

之れと相俟つて忍者は體臭を消す練習をする。臭ひがあつてはいけない。それは人の眼を掠めた時に直ぐ発見されて了ふからです。だから特臭のある——即ち一種の體臭のある人間は、忍者者になる資格はない。それによつてシエバ

體臭を消す練習

いくらでも酒煙草を呑む練習

トドなんかに見見される。それで昔から忍者には體臭のない人間を選んだ。では體臭を消す練習はどうするかと云ひますと、それには酒や煙草を絶対にやらない。何故かといふと酒、煙草は體臭を生ずるからであります。それから臭いものを喰べぬ。葱、韭、大蒜の類、芹、胡椒類、それに脂濃いもの、鹽辛いもの、汗の出るもの、これらは絶対に禁ずることになつて居ります。さうして肉食を避けて、なるべく菜食主義にする。

また高等戦術のために、酒や煙草をどれ程飲んでも平気で居られる練磨が必要である。私は新聞記者を永くやつてゐましたが、やつぱり酒、煙草が飲めないやうぢやいけない様です。實業方面の外交をやる人でも、のむ人の方が成績が上るやうであります。

煙草といふものは愛嬌がありまして、非常に便利な場合がある。汽車なんかに乗りましたが、煙草を喫む人間は早速話が出来ます。煙草を出しまして「マツチをお持ちでせうか」とやる。マツチを借りますと、「どうも有難う、時にこゝはどの邊でせうか？ よいお天気ですな。どちらへおいでですか？ 何の御商賣で？」など、何でも聞き出せる。ところが煙草を喫まない人はお互に恐い顔をして睨み合つて居ります。

酒なんかもその通りで、敵國の殿様の情勢など調べに行つた時でも、いきなり門番のところに行つて「一寸訊くことがあるから言へ」と云つても誰も言はない。さういふ時には酒を持って行つて「まあ一杯」と言つて一緒に飲んでゐる中に氣分の出た頃を見計つて「どうだい、唄でも歌はうじやないか」「いや

立て続けに煙草を十箱

今日はいけない。殿様がゐるから」といふので、一べんに在不在が判る。一升の酒で直ぐ看破できるのであります。故に忍者は一生を通じて酒、煙草は禁ずるけれども、必要によつてはどれほどでも飲める練習をするのであります。

實は私は、以前には酒も煙草も全然やらなかつたが、今はあつても、なくても平氣です。煙草なども外に出る時は努めて喫むやうにしてゐるが、皆さんの中でも本當に喫んでゐる人はゐない。喫み方が違つて居ります。煙草といふものは、嗅ぎ煙草といつて匂ひを嗅ぐのが本當です。匂ひは主として煙の匂ひでありますから、それを口で喫んで居るのが間違つてゐる。口は喋べると食ふところで、鼻が吸ふところでありませう。空氣でも何でも鼻から吸ふて居りますだから吾々は煙草を鼻から吸ふて御覽に入れます。それから人はよく喫むく

と云ひ乍ら、煙を吐き出してゐる。煙草といふものは喫んだら出さないので
す。吸ふた煙は胃袋へでも肺へでも自由自在に入る練習をするのであります。
煙は少しも口からも鼻からも出しません。本當に呑んでしまふのであります。
しかし胃を抑へますと出て來ます。

この練習には鼻の孔に一本づゝ二本、口に三本、一時に五本やります。さう
して立て續けに吸つて、私の記録は十箱吸つて居ります。若しこの記録を破る
方がありましたら、今度は二十箱位やらうと思つて居ります。かうして鼻から
喫むやり方をいたしますれば、第一裏から通つて直接入るのでありますから、
齒の方には影響しない。だから匂ひがつかない。それから脂ヤニが溜れば掃除が出
來る。紙ヒヤリ縫を作つて喉佛の後から通せば掃除出來ます。

大酒は一斗以
上

酒なんかも、その通りで、忍者の方では、人間といふものは高いところにレ
ヴェルを置いて、それに近付く事を努めよと言ふ。随つて、酒を飲むにも、五
合以上二升迄を匂ひを嗅ぐと云ふ。三升から五升迄を舐めると云ふ。五升以上
一斗までを飲むと云ふ。一斗以上でなければ大酒と言はない。私は幾らか飲む
方です。今迄四時間かゝつて八升五合といふ最高記録がありますが、昨年中一
番飲んだのは六升五合であります。酔つた事がない。酒に酔ひ煙草を喫み過
ぎるといふ事は忍者の方では間違つてゐると云ふのです。これはいつもは二合
か三合で酔ふ人でも、今日は重大な用件がある。或は高位高官の前であるとか
いふと、いつもの量を超えても酔はないといふことでも判る。又匂ひを嗅ぐこ
とも出來ない様な御婦人でも三々九度の盃で酔はらつたといふことはない。要

どんな「いか
もの」でも喰
ふ練習

するに酒や煙草といふものは、精神現象によつて酔はらうものである。晩酌は一合でも酔ふといふが、晩酌は酔ふやうに出来てゐる。これは一日の勞を慰め、陶然とするためなのです。酔ふのが當り前です。忍者は一杯でも酔はらうことが出来るが、百杯二百杯でも酔はらはない。かういふ練習をするのであります。

【三】毒物・いかもの食ひ練習

次には何かといふと、いかもの食ひを練習する。何故かういふことをするかといふと、忍者は石に噛りついても、生きねばならぬ。土を掘つて食ひ乍らでも生をつなぐ必要がある。さういふ時は何でも食はねばならぬ。何を食つても

毒物を喰つて
も當らぬ練習

腹に障らないやうになるために、忍者は芋虫、やもり、いもり、蜥蜴、百足、さういふものを食べて練習します。

それと同時に毒物を食つても何ともない練習をやる。人を暗殺するために持つてゐる毒薬なんかは、毒味をしても自分が參らない様にしなければいけない。同じ毒薬を飲んで人を殺しても、自分は死なないといふ練習をやつて居ります。又捕つた場合、證據物件となるから、毒物なんか全部呑み干さねばならぬ。この爲には毒物に限らず、密書でも瓶でも何でも彼でも食つてしまふ。かういふ事が今日でもよくあります。それは何かといふと、例へばスパイが寫眞を撮る場合、一寸四方位の寫眞機を使つて居ります。中には時計位の寫眞機があります。これは龍頭のところがレンズになつてゐて、その中にフィルムが三十八枚

硝子や傳染病
の細菌を喰つ
ても平氣

入ります。そして要塞地帯などでも、酔ばらひながらポケットでシャツターを切つて撮つて居るのである。そして若しも危険といふ場合にはどうするかといふと、撮影したフィルムをぐる／＼巻いてカプセルのやうなものに入れて飲んで了つて、危険地帯を脱した後、下劑をかけて出して現像しますと、立派な寫眞が出来上る。私なんかも大抵のものは食つてゐる。今まででも硝酸、硫酸、「猫いらす」をやつて居る。「猫いらす」は、トースト・パンにバターをつけて、それにまぶして食つて居りますが、何の作用もなかつたのです。「猫いらす」なんでものは人間を殺すものぢやない。鼠を殺すものだ、さう思ふだけでも何ともなく食へる。

それから硝子のコップですが、これが證據物件とすると、全部食つてしまは

人間が病氣を
ひするの
は間違

なければならぬ。私は今日までに硝子のコップを千五六百食つてゐる。二十五分もあれば一個食へます。煉瓦は四十分で食へる。所がよく人は硝子を粉にして食ふと三ヶ月位で死ぬと言ふが、私は千六百個食つてゐるが、今日まで死なない。その他コレラ菌、チブス菌、肺病の略痰、こんなもので、ペロリと呑んだものですが、一回も病氣をやつたことはありません。

私共の方では非常に病氣を嫌つてゐる。第一病氣をやるのが間違つてゐると云ふのです。何故かといふと病氣は讀んで字の如く氣を病むといふことである氣を病むから病氣になる。中には御丁寧に持病を持つてゐる人がある。これなんか以ての外だ。そんなものは持たなければよい。所が病を持つて居る人に限つて、それを大切にする。例へば胃が持病だと云ふ人に、どういふ養生をして

ゐるかと思ふと、必ず十人が十人、消化のよいものを食べて居る、流動物を擲つてゐると申しますが、これは忍者の方では間違つてゐると考へる。何故かといふと、胃が悪いといふことは、胃がサボつてゐるのである。怠けてゐる胃に益々怠けてよいやうなものを與へて甘やかすから愈々怠ける。この時これでも貴様怠けるか、これでもかといふ工合に、固いもの、消化の悪いものをやれば胃も働かなければならなくなるから働く、だから丈夫になるのであります。

忍術の方ではかうした積極主義が第一になつて居つて、消極主義は絶対にいけない。これが忍者の建前となつて居ります。

その他、少しものを食つても腹が一杯になり、多くものを食つても満腹にならぬといふ練習をやる。これは胃袋が自由に動かせるから出来るのであります

少食満腹・大
食不満腹の練
習

膨脹も収縮も自由自在であります。それですから、吾々は大食ではありません。二食二杯主義であります。しかし食べる時は、かけそば二十五杯に天井八杯といふ記録がある。酒は先に申したやうに八升五合飲んでケロリとしてゐる。これは胃の収縮運動、腸の蠕動を自由にやりますから、直ちに排泄できるのであります。

よく「胃は不随意筋だから動かすことは出来ない」と言ふ。それがいけない不随意筋といふのは誰がつけたか？ これは人間が勝手につけたので、不随意筋などといふ言葉は片輪者のいふこと、氣力のない者のいふ言葉であつて、本當の仕事をするものには、不能とか不随意とかいふことはない。彼のナポレオンは「自分のデイクシヨナリーには不可能といふ言葉はない」と云つたが、人

真劍勝負七回

間が成らぬといふのは爲さないのである。「爲せば成る爲さねば成らぬ何事も成らぬは人の爲さぬなりけり」と云ふが實に然り、出来ないとはいふことは努力が足りないからであります。

私は真劍勝負を七度ばかりやつて居ります。或る時は卑怯な奴が竹槍で突込みまして、今でも傷痕がありますが、右下腹のところに五寸ばかり入りましたそれを引出したゞけでドロ／＼と何か出たやつを、中へ入れて帯をきり／＼巻いて、その頃父が非常に喧しかつたものですから、風邪をひいたと稱して二三日寝たきり、そのまゝで癒つてしまいました。種明しをするやうですが、その時盲腸の手術が自然に出来たかも知れません。爾來どんなものを食べても何ともないのであります。

精神の統一と
精神變装の必
要

又私は針を全身に二百五十本突刺した記録があります。一、二年の間に五百本の記録をつくつて見たいと思つて居ります。

【四】變 裝 術

かうして五體に如何なる迫害を蒙つても、何ともない練磨が済みますと、その次は變装術に入ります。

變装術には先づ精神の統一と云ふ事をする。そこらの修業者が、精神の統一は無念無想と云ひますが、無念無想は統一ではありません。中には忘我の境と言ふ。さういふ人に聞いて御覽なさい。「君は精神統一と言ふが、どんな工合になる?」「いゝ氣持になつて何も判らん」と言ふ。何も判らんなら、眠つて居

る方がいゝ。即ち無念無想といふ事は、念無し想無しといふ事である。又怒濤萬嶽も意としないといふ佛教などの精神統一も、忍者の方では本當の精神統一ではない。本當の統一は無我一念の境界に入る。無我一念の境界に入ると、吾の能力はどうなるかと云ふと、先づ精神が統一され、同時に吾々の聴覺は十四倍し、次いで視覺は八倍、そして嗅覺、味覺は三倍するものであります。よく「精神一到何事か成らざらむ」と言ふ。それだけの能力が発揮されれば、一遍聽いたことはどんな事でも憶える。一遍見たことはどんなことでも頭に入るといふ境地になる。随つて變裝の場合、その者になり切ることが出来るのであります。一時「らしく主義」といふ事が云はれたが、これは鍍金であります。「らしく」なくなれば、元通りに戻つてしまふ。忍者の變裝は「らしく」では

變裝の諸形態

けない。女なら本當の女になり切らねばいけない。商人なら本當の商人になり切る。その爲には眞の精神の變裝が出来ねばならないのであります。

昔は七法といつて、變裝術には、出家、山伏、放下師、猿樂、商人、常形、虛無僧の七つの化け方がある。出家は僧、山伏は山伏、放下師は香具師、猿樂は俳優、商人はそのまゝで、常形とは普通の形、それから虛無僧であります。すべて今日申す非戰鬥員であり、忍者はこれらに化けて情勢を探つたのであります。

私はさうした目的のために或る宗教の方の學校を出まして眞言宗の僧籍を得たこともあり、枕經を上げてお布施を貰つたこともあります。山伏の先達をやつたこともあります。踊りは下手糞ですが、藤間の名取になつて居ります。ダ

諸藝百般の練習

ンスもやります。それから唄、諸國の何處の唄でも歌へるつもりで、全國民謡研究会の顧問、評議員をやつて居ります。ヲチオの民謡は私等が初めて放送したやうに思つて居ります。それから私の「西湖」といふのは實は繪の方の雅號であります。文展を二度落選しましたが、今でも彫刻と、繪の方ではつまらない畫會に出して居ります。武道は何によらず、免許皆傳以上たるべきことゝなつて居ります。これは全部やらねばならぬ。その上、難しいのは虚無僧なら虚無僧になり切る時は尺八の音を出さねばならぬ。物の利用をいたします。例へば密書か何かに入れて、これを吹いて尺八の音をさせて敵を欺く、今日實驗いたしますには新聞紙でよろしい。新聞紙を筒形に巻いて吹けば尺八の音色を以て追分でも六段の調でも吹いて御覽に入れます。またヴァイオリンの音は手を

口に當てゝ出せる。マンドリンも、指で口を叩きながら音を出すことが出来ます。かうしてギターでもクラリネットでも、何でも出来ます。これは擬音を出す方法であります。又甲賀の方では、犬なんかよく使ひます。そのためには彼等の習性、慣性を知つて彼等と話をする練習をする。犬には三十五通りの鳴聲がありまして、之を知れば自由に犬と話が出来ます。同じ犬の鳴聲にしましても、黒犬、赤犬、白犬と、みな違ふのであります。年老つた犬は年老つた犬の聲がある。それから夜半以後の淋しい聲がある。所謂遠吠であります。或は怪しいと云ふ時には、怪しい聲がある。これらがそれ／＼使ひ分けられなくてはいけない。二匹の犬の喧嘩なんか、自由にできます。聲帯模寫は、古川綠波なんかより私の方が先であります。

六 忍術の方法

〔一〕 利用事物及び用具

三道・六具

かういふ練習をやつて愈々忍し込みであります。先づ天地人の三通を知る天象氣候、地理風土、人情風俗、この三つを利用する。さうして六具を持つて行く。それは編笠、かぎ縄、藥、三尺手拭、石筆、打竹、この六つであります。編笠は顔を隠すため、顔面を變へる爲には蘇枋染の三尺手拭と云つて、蘇枋染にしたもので、顔を蔽ふ。悪い水なんか飲むときにも、それを浮かせて飲めば

毒瓦斯は昔から我國にあつた

何ともない。藥は毒藥とか催眠藥など色々あります。毒藥といふものは道端に幾らでも落つこつてゐる。忍者の中にはアルカロイド、即ち草根木皮に依るアルカロイドに依つて殺す者があります。

人を笑はせたり、噁をさせたりする藥は幾らもある。今のイペリット、ホスゲンなどいふものが、立派に昔からあつた。よく毒瓦斯は歐洲大戰後に外國から來たと云ふが、とんでもない。日本にはとつくの昔にある。催眠藥の中には煙草の煙くらゐで、フツと吹き込むと人が眠る藥があります。よく忍術者は忍び込むと催眠術をかけるといふが、あれは或る植物から採る藥を用ひるのであります。自分は豫め解毒劑を飲んでおいて、懐中の懐爐灰で燻べる。

この懐爐といふものも忍術者の造つたもので、打竹と稱し、一つには暖をと

り、又信號用に用ひる。防空演習などでも喧しく云ひますが、煙草の火などでもよく見えるものです。明りといふものはよく見えるもので、東京市の明りは三十里、四十里先から見える。京都などでも、二三十里先から見えるさうです。だから燈火管制の時なんか煙草の穴一つがスパイの信號になります。同時に、懐爐の火なんか、これを吹いて火の粉を散らし、味方に合圖をするのであります。

それから煙幕なんか昔からある。仁木彈正が巻物を叩へて印を結んでゐると、白煙が濛々と立上つてゐる繪なんかよくありますが、あれは巻物の中に煙幕の薬を仕掛けたもので、口に叩へてゐる處に穴があつて、ブツと吹くと二つの薬品が化合して煙化し巻物の両端から煙が出るやうになつてゐる。敵が何

煙幕も爆薬も昔からあつた

パラシュートは七百年前から

事かと思つてゐる間に、第二段の方針に移つて逃げる、さういふ道具が澤山あります。

御承知の如く、米一俵から摘出します澱粉を材料とした或る種の爆薬ですがそれに依つて、相當の建物を人諸共爆破してしまふ力のあるものもあります。よく米倉から自然發火することのあるのも、かういふ原因からだと思ひます。

それからパラシュートなんか、日本に於きましては七百年前に出來て居る高所から飛ぶ方法は先に申述べましたが、忍術者は五十尺を飛ぶ。それ以上になりますと羽織を擴げて両手で裾を持つて飛び降りる。又は刀の柄に羽織をかけて飛ぶ。それ以上百尺を超えますと、このパラシュートで飛んで居ります。

それから水の上を渡る機械があります。水蜘蛛と云つて、下駄の少し大きい

潜水服は四百年前から



トーニシラバたれさ夫工に壽年百七

一尺四方位のもので、それを履いて渡れば水に溺れずに渡れる道具であります
又二人くらゐ乗れる舟になる道具もあつて、これは疊んでおけば懐中に入るの
であります。

潜水服も四百年前から我國で
やつてゐる、實に立派なものが
あります。

よく何でも外國製品、外國製
品と云つて外國の方が頭がよい

やうにいふ日本人があるが、とんでもない間違ひで、吾々忍術者の方では東洋
人種といふものは、世界各國いつれの國民よりも進歩してゐるものだといふこ

とを常に教つて居ります。これに就て童話があります。神様が人類を造る時、
土を焼いて造つた。その時初めのうちは、おつかなびつくりで焼いたものでは
から、白ちやけた素焼みたいなものに焼けた。素焼は諸能力はあるが身體が毀
れ易いし、どうも感心したものではないといふので、今度は思ひ切つて焼いた
ところが眞黒に焦げた。餘り焼き過ぎたので、頭の方はどうも良くなかつた、
けれども、身體は丈夫な者が出來た。それで中間に程よく焼いたところが、狐
色——黄色に丁度よい按配に焼けた。これは頭も良ければ、身體も丈夫に出來
完全な人類である。これは最もよい處に置かねばならぬといふところから、宇
宙から見ても一番よい國、瑞穂の國、豊葦原の中津國即ち日本に置き、次に朝鮮
滿洲、支那方面に配置した。眞黒に焼けたのは、もと／＼暑い處に馴れてゐる

潜入の諸方法

から、赤道直下の南洋、印度、アフリカ、エチオピア方面に置いた。残つた白いのは氣候風土もどうでもいゝといふ處においたといふのであります。

こんな事をいふと、他の人種の者に怒られるかも知れぬが、とにかく、東洋人種は何處の國民よりも頭がよく、優れた、完全なものであるといふことを考へねばならないと思ふのであります。

話が横道に入りましたが、いよく／＼忍者が忍び込むには、色々方法があります。隠れ笠隠れ蓑などあります。又逃げるにも、たぬき隠れ、観音隠れ、菱の實を撒き乍ら逃げる等あります。これは追取り刀で追駈ける者が、菱の實を踏むから轉ぶ。その間に逃げる法であります。たゞ着て居る羽織にしましても裏も表も使へる二様の働きをいたします。これは襟が両面につけてあります。

蛇・鼠の使い方

着物にしましても、三通りくらゐ變つた着物に見える作り方があつた。路地へでもパツと入れれば、そこから出る時は、すぐに服装が變つてゐるといふわけでありませぬ。

又蛇などを使ふ時でも色々方法がある。あれは馬糞紙に入れて行くと、出した時大變暴れます。議會で蛇投げ騒ぎがありました。新聞紙などに包んで行くから餘り効果がなかつたわけです。

鼠なんかよく使ひます。飼ひ馴れた鼠を連れて行つて、一疋一疋放してやる。ガタガタと暴れますから、宿直の者が何事かと出て見ると鼠である。二疋三疋の間は見に來ますが、終には又鼠かといふので氣にしなくなる。その時こつそり入つて、暗殺したり、密書を奪ふといふやうな手段をとるのであります。

動物の擬態

そして逃げる時は、異様な風體をして、敵の目を晦ます。忍術者の百日蟹なども、その例であります。

それから犬の聲の得意な者は犬の鳴聲を出す。すると忍術者が犬に化けたと思つて、逃がすものと追駈ける。さういふ時には犬が必ず集るものですから後事は犬に托して、一時間四里の速力で逃げる。追手の方では後で犬を引張つて来て、化けたんだといふ。これが小説等にされて忍術といふものは不思議なものであると言はれて居ります。

【三】 忍術の本義

けれども、要するに、さういふ心理状態を科學的に利用し、この身この儘を

聲れても猶己
まざるが忍術
の精神

「忍」の意義

犠牲にして、敵情を探り、自軍に有利な計略を立てる。危険に曝された時に於ては、あらゆる方法を以て逃げ、自己の使命を完了する。これが忍術の本義であります。

この忍術の精神といふものは、どこまでもやり通すといふことである。よく云はれる言葉に「聲れて後己む」といふことがあります。忍者はそんな馬鹿なことではどうなるものかといふ。聲れても己まぬ、死しても七度、八度生き還り、護國の鬼となり、神となり、あくまで國のために盡す、即ち聲れても猶己まざる精神を以て忍道の本義といふのであります。

忍といふ字は刃の下に心と書く。人間は常に刃の下に置かれてゐる。危険に曝されてゐるといふことが忍である。だから常にこの眞剣さを以て生きろとい

健康と體力の
最大限

ふことが忍道の心である。忍術の「忍」は忍び込む忍に非ず、耐忍の忍なりといふのが本義であります。最後の勝利は忍たあるといふ風に説いて居ります。その爲には忍者は常に健康状態を保つ。眞の健康を保つのであります。眞の健康とはどんなものであるかといふと、吾々の五體は非常に弱いやうであります。例へば目をつむつた力といふものは、自分の體重の三分の一に耐へる力がある。よく見世物などでも目で物を吊り下げたりしますが、あんなことは何でもない。私は十歳までの子供なら目で吊つて、振廻すことが出来ます。又齒の力は二十六貫の重さに耐へるといふが、私は齒で棧などに喰ひついておら下ることが出来ます。若しそれが出来ない人は體力の弱い人だ。人間といふものは自分の體重を十分に支へ得る力が齒にあるのであります。

腕の力は腕を張つたゞけで體重の七倍、力を入れれば何倍でも支へることが出来る。ロシアのケンテルといふ者が來て二臺の自動車を引張つて見せて居りましたが、あれは少しインチキです。どういふわけかと申しますと、右の自動車の綱は右腕に通してあるが、その環を左手で持つてゐる。左側の自動車の綱も同じく左腕に通してあるが、その環は右手で持つてゐる。さういふ風になつてゐますので、自動車が兩方に引張つても、その力は腕にかゝらない。たゞ山形になつた兩綱が一直線にならうとするやうに垂直に作用するだけです。すべての力は腰に働く。然るに腰といふものは、三四千ポンドを支へ得る力があるのだから平氣である。私なら、自動車を二臺づゝでも引張ります。それから腹の力、仰向になつた腹の力は十五貫の體軀の人なら六百貫に耐へ

凡ゆる苦難に
耐える體力の
鍛練

る力がある。十八貫の人は八百貫のものに耐へる。私は仰向けになつて自動車に轢かせる實驗をやつて居りますが、何でも無い。私は二十一貫五百ありますから、六人乗自動車に十人位乗せて轢かせても何でもありません。空の自動車に轢かれて死ぬなんて人間ではない。

腰の力は前申した通り三四千ポンドを支へ得るのであります。

さて身體を鍛練する方法ではありますが、忍者の方では常に温浴を避けて水浴をとります。ちき風邪を引くやうではいけないので、皮膚の鍛練をする。昔は棕相繩で擦つたのですが、只今は組の子束子が一番よろしい。これに砂をつけて擦ります。砂をつけるのは刺戟を強くする爲で、かうしてゐると、きめが細く色も白くなります。

知何なる艱難
をも克服する
精神

腕の練磨には初めは袋の中に砂を入れて叩く練習がいい。それを砂利にし、次に石にし、かたまりの石にする。細い部分はどうして鍛へるかといふと、これには木の槌が一番いい。その次にはハンマーがいい。それも一貫目、二貫目三貫目、といくらでも殖やす。

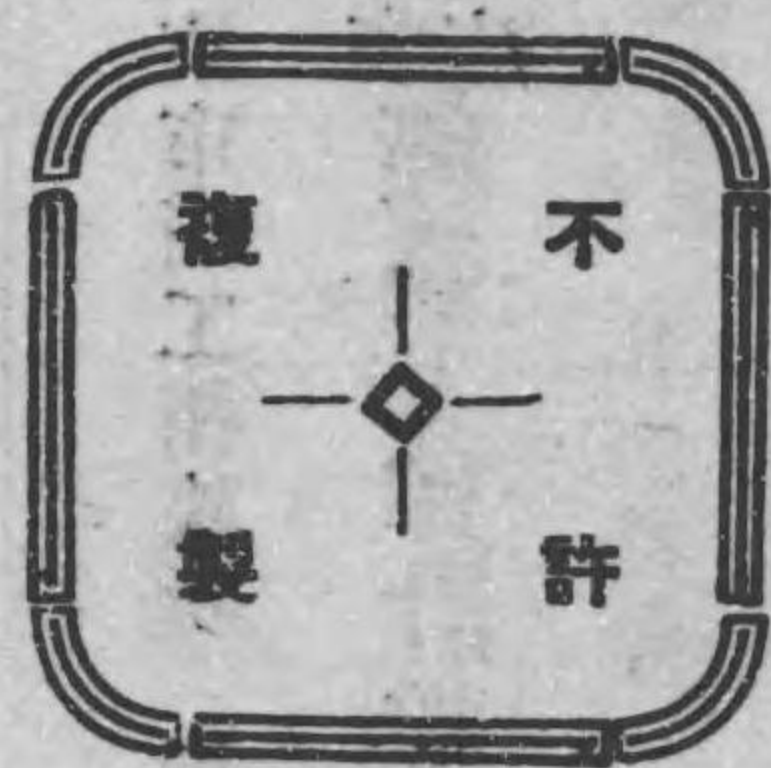
胸を鍛へるには、私は八貫目の分銅を自分の胸に打つけます。これで練習する。かういふものがぶつかると肋骨が折れやしないかと云ふが、肋骨を折つたらどうなるだらうなど、思ふことがいけない。肋骨は十二本あるから一本位折れてもいゝといふ氣概でなくてはいけない。

これは全部、自ら如何なる困難壓迫にも、つかつて行くといふ精神を練磨するためであります。忍術の方では自らぶつかつて行くところに於ては絶対に何

物もない。總ての難關が來るのは神の恵みである。叩いて叩いて叩きのめす所に日本刀の切れ味を生ずる如く、人間も難關にぶち當ればぶち當る程鍛へられる。人間に災難が來るのは、神がその者を恵んで大成させむが爲に、その大任に耐へ得るかを試みるのである。その時にそれを逃避する人間は絶対に成功するものではない。難關が餘計ある人間こそ、成功の域に達するのである。だからあらゆるものに打克つて、死するともやり通さうといふ氣分を持たねばならぬといふのが忍道の精神であります。

昭和十三年七月廿三日印刷
昭和十三年八月一日發行

【定價五十錢】



編輯者

野

口

保

元

東京市日本橋區通一ノ四

印刷者

武

宮

敏

一

東京市牛込區揚場町八番地

印刷所

東

京

印

刷

東京市牛込區揚場町八番地

發行所

東京市日本橋區
通一丁目四番地

東京講演會出版部

電話日本橋(24)一〇〇八番
振替口座東京一五二五番

東京講演會
専務理事 野口保元著

速記讀本

速記を習ふ人、速記者を使ふ人のために速記とは如何なるものかを、全般に亘つて何人にも分るやう、限なく説き明かした速記入門兼叢書。

四六判 八〇頁
定價 五十錢
郵税 六錢

東京市商工相談所 編
商店經營と會計整理

小賣商店經營上の通弊、缺陷を衝き、店費と生活費の仕譯、賣上の整理、決算、集金と支拂、金の繰廻し、其他小賣店經營のコツを公開された良指針！

四六判 一二二頁
定價 三十錢
郵税 六錢

顯相家 松井桂陰著
人相によつて
人を説く法

人相を見て、性格を判斷し、性質に應じて人を説き導く秘訣を誰れにも分るやうに講述したもの、外交、對談、勸誘、交渉の極意、何人も讀め！

四六判 八〇頁
定價 二十錢
郵税 三錢

諸官省書記官 講述

諸官省の話

本書は諸官省書記官諸氏が、各官省の組織や所管事務に就いて放送せる國民講座、内容正確、平易、明快、興味深く有益なる公民讀本として好評噴々。

四六判 三二〇頁
定價 一圓
郵税 十錢

衆議院議員
辯護士 片山哲著

退職積立金法の 實際手引

退職積立金法の權威片山哲氏が、難解複雑なる本法を逐條解説したもので、早わかり中の白眉、本法逐條解説、附屬法規、諸届書式全部網羅。

四六判 一五〇頁
定價 五十錢
郵税 六錢

國策研究會編

準戦時下の勞働問題

戦時體制の急進展は必然産業勞働、災害、扶助、勸練工業成等の諸問題を焦眉の問題化した。戦時體制に伴ふ勞働對策を取扱つた唯一の書！

四六判 二八〇頁
定價 一圓廿錢
郵税 十錢

電話本橋本(24)番八
振替東京一五二番五

東京講演會出版部

東京市日本橋區
通一丁目四番地

東京市日本橋區

通一丁目四番地

東京講演會出版部

電話本橋本(24)番八
振替東京一五二番五

速記部御紹介

最も親切なる速記

演説會、講演會、公判、總會、會議、座談會、研究會、
合評會、講習、著述、訪問速記、漫談、講談等に皆様の
爲めの本會速記部を充分御利用下さい。

◇何時たりとも御用命に應じます。

◇その正確、迅速、低廉に就ては既に御用命下さつ
た諸氏の御定評を載いて居ります。

◇標準料金——講演一時間八圓以上。

會議、座談會は一時間十圓以上。

◇御申越し下されば部員直ちに參上致します。

東京市日本橋區通一ノ四

東京講演會速記部

日本橋(24)〇〇〇八番

速記は必ず東京講演會へ

終